

やけののそよ風



No.5

令和4年6月1日
大阪市立焼野小学校

「おもいやり算」

「+」は、たすけあう
 「-」は、ひきうける
 「×」は、声をかける
 そして、
 「÷」は、わけあう
 それは、人を笑顔にする算数
 おもいやり算
 ほら やさしいでしょ

(「AC ジャパン」テレビ広告より)

左の「おもいやり算」は、以前テレビで流れていたCMです。

「+」は、「たすけあう」。つまり、「気持ちを合わせること」。人と人が心を合わせれば大きな力となり、一人では難しいことも解決できます。「-」は、「ひきうける」。つまり、「相手を受け入れること」。相手のことを考え、手をさしのべることで、相手に喜びを与える、自分も嬉しくなります。「×」は、「声をかける」。「目をかける」「気にかける」など、「心のどこかで相手を見守る」ということ。相手の立場になって考えることで、やさしい言葉や励ましの言葉をかけることができ、相手の心が和みます。「÷」は、「わけあう」。つまり、「気持ちを分かち合う」こと。心を分かち合うことで、喜びを大きくしたり、心の負担を減らしたりすることができます。



「人を笑顔にする算数」とあるように、小さな思いやり、やさしさが人に笑顔を与えます。自分自身を振り返ってみても、うまくいかなかったり、落ち込んだりしたときには、周りのだれかが「おもいやり算」で支えてくれました。人に対する思いやりの心ややさしさは、私たちが生きている限り、学ぶべきものです。一人一人が「おもいやり算」を意識し行動することで、周りの人の安心や笑顔につながります。

子どもたちが「おもいやり算」の心をもって行動することで、焼野小学校はますます笑顔いっぱいの学校になることでしょう。子どもたちが「明日も登校したい。登校して友達に会いたい。」と思える、楽しく安心してすごせる学校をつくっていきたいと思います。

【子どもに「家の仕事」の習慣を】



先日、6年生の子どもたちが、家庭科の授業で、「家事」に対する日本と外国との意識の違いを学習しました。授業の中で、アメリカでは共働き夫婦の93%が家事を分担している一方で、日本では56%にとどまっているという結果を知り、子どもたちは積極的に家事に関わろうとする意識を高めています。

昔は、掃除、洗濯、食事の用意などの家事は、電化製品がなく人手が必要だったので、子どもの仕事も多くありました。近年は、掃除機、洗濯機などが普及し、ほとんどが電化製品がするので、人手が必要ありません。ついつい家事は大人がしてしまうこともあるでしょう。生活哲学家の辰巳渚さんは、子どもが「家の仕事」をすることには、次のような効果があると著書の中で述べています。

- ・気が付く子になる
- ・生活技術の基本が頭ではなく、体で覚えられる
- ・ものを大切にする子になる
- ・コミュニケーションができる子になる
- ・家族の一員としての自覚が育つ

- ・サッと動ける子になる
- ・生きることに前向きな子になる
- ・人ときちんと向かい合える子になる
- ・大人へと成長させる

「子どもを伸ばすお手伝い」(辰巳 渚 著)より

「家の仕事」と言っても、「新聞受けから新聞を取ってくる」と簡単なことから、「料理をつくる」のように難しいことまでいろいろとあります。同じ著書に、「『使ったものを元に戻す』それが片付けの本質であり、家事の基本である。」と著者の辰巳さんは書いています。片付ける場所だけ決めれば、そこに戻すだけで片付きます。誰でもできる「家の仕事」は、「自分の物を片付ける」ことです。子どもの年齢や家庭の状況によって家の仕事の内容は違ってくるでしょう。一度にいろいろなことに取り組ませることは難しいですが、できることから少しづつ取り組むようにしたいものです。